モンゴル・観光ビジネス事情

みずからの経験にもとづき、モンゴル経済をささえる観光ビジネスの現状分析と、観光ソフトを充実するための提言

文・内田敦之（財団法人千里文化財団）

モンゴルがずいぶん身近になってきている。マスコミにたびたび登場し、出版物も、つぎつぎにでるようになった。おかげで、以前のように「モンゴル」といって、「ああ、アフリカの……」といわれることがほとんどなくなった。テレビのおかげで「大草原」のイメージはしっかり定着してきた。また、何百頭ものウマが疾駆する競馬、土俵のないモンゴル相撲、さらにユーラシア大陸をまたにかけて活躍するビジネスマン＝担ぎ屋なども紹介されるなど、ひろく知られるようになった。

メイド・イン・モンゴル

一九九〇年以降、日本とモンゴル国間に直行便が運航されるようになり、両国は四時間半でむすばれた。おかげで以前のように中国やロシアを経由する必要がなくなり、モンゴルをおとずれる旅行者が飛躍的に増加した。人の往来とともに物流もさかんになった。かつて高級品であったカシミヤ製品の価格が下がり、ずいぶん身近になった。カシミヤ製品はカシミヤ・ヤギのうぶ毛を原料としているが、そのほとんどがモンゴル国、中国内モンゴル自治区（以下、内モンゴル）などモンゴル高原産である。

モンゴル国から日本へは馬肉の輸出（九六年、四トン）も軌道にのりだし、それ以外にも、銅（同年、三万二〇〇〇トン）や金（同年、四・八トン）など鉱物資源の取引もはじまっており、モンゴル国の民主化以後、貿易品目はゆっくりとしたペースではあるが、着実にふえている。また、南の内モンゴルからは、牧草やソバなどが輸出されている。モンゴルは、地下資源がゆたかで牧畜がさかんなため、ビジネスの条件がさらにととのえば、この方面の貿易品目はさらにふえていくだろう。まったくの自然のなかで育てられた「モンゴル高原ビーフ」や「モンゴル・ヨーグルト」がもっと手軽に味わえる日がくるかもしれない。

民主化から市場経済化へ

旧ソ連の支援をうけて、一九二四年、世界で二番目に社会主義国となったモンゴル国（当時はモンゴル人民共和国といっていた）は、中国・ソ連両国の援助によって国家建設をすすめていた。三九年のハルハ川戦争（ノモンハン事件）と六〇年代の中ソ関係の悪化、六二年のコメコンへの加盟によって、旧ソ連の影響力が強まり、「ソ連の一六番目の共和国」などといわれるようになった。貿易総額の九五パーセントを旧コメコン諸国が占めるだけでなく、コメコンの援助・支援によって経済がなりたっているという状態であった。コメコン体制に組みこまれたことで、畜産加工業と地下資源開発に特化し、産業構造がかたよることになってしまった。

このような構造が七〇年間つづいていたが、旧ソ連のペレストロイカの進行とともに、すこしずつ変化があらわれてきた。八五年六月、人民革命党中央委員会総会の決議で、個人および機関により副業として農牧産品が私的に生産されること、あるいは販売されることが奨励されることになった。それと同時に、都市部における特設自由市場の建設や定住地住民の私有家畜数枠の拡大が決議され、計画経済の枠内での経済改革がゆっくりとはじまりつつあった。ベルリンの壁崩壊後の八九年一二月、三五〇人の若者が「民主化」と「人権尊重」をかかげ、民主化要求集会を決行、民主連盟の結成を宣言した。九〇年になるとおおくの民主化推進グループがデモと集会を開催、なかには一〇〇〇人規模の集会もあったという。

その後、これらのグループからおおくの政党が生まれた。これら一連の動きに対し政府当局もさまざまな対応をこころみたが、民主勢力の勢いはおさまらず、同年三月、民主連盟幹部らがハンストを開始、「政府・党幹部の総辞職」を要求、この二日後、当局は政府・党幹部の総辞職を発表している。さらに、四月、民主勢力は三万人の無許可集会――当時、集会は当局の許可を必要とした――を強行、民主的な選挙による「人民暫定会議の開催」を要求、これに対しても当局は譲歩している。このようにモンゴル国の民主化は武力衝突なく平和的にすすんだ。九二年二月、民主化の総決算ともいわれる新憲法が施行され、社会主義と決別、市場経済原理による国家再建をめざし、国名もモンゴル人民共和国からモンゴル国にかわったことで名実ともに本格的な経済改革がすすんでいくことになる。

民主化以後、モンゴル国は西側諸国やＩＭＦ、世界銀行など国際金融機関との関係強化につとめ、これらの諸国、機関の支援により経済再建と市場経済化をすすめるようになる。国際金融機関の協力で九一年より「経済改革プログラム」を策定し、これまでに㈠国有財産の私有化、㈡価格の自由化、㈢為替レートの自由化、㈣法的環境の整備などをすすめてきた。これにつづき、ＩＭＦとのあいだに「経済構造調整プログラム（九三～九六年）」を合意している。国内総生産は、九〇～九三年は連続マイナス成長であったが、九四年以降プラスに転じている。家畜数は私有化後、増加傾向で、九七年、史上最高の三一〇〇万頭を突破、とくにカシミヤ原料で利益の大きいヤギは伸び率がいちじるしく、一〇〇〇万頭をこえた。国民一人あたり四頭以上の計算になる。失業率も、九四年の八・七パーセントから三・八パーセント（九六年）に低下、インフレ率も月平均三・六パーセント（九六年）と大幅に改善された。工業生産および貿易額も増加、しばらく低迷していた経済にもあかるいきざしがみえてきたといえる。

ただ、牧畜国家でありながら、食肉、乳製品の生産高が減少しつづけていることには注

目しなければならない。これには流通の問題が大きく、インフラ面での改善がなければ増産はむずかしいという予測である。また、穀物の収穫高は漸増しているものの、九五年度の収穫量は九〇年比六四パーセントであり、民主化前の水準にはほど遠い状況がつづいており、小麦粉は全輸入量の九〇パーセント、コメはほぼ一〇〇パーセントを中国から輸入している。

人びとの暮らしの明暗

急激な市場経済化による経済・社会の混乱は人びとの生活を直撃した。一九九二年は物不足がもっとも深刻な時期であった。当時は配給制がとられており、小麦粉、肉、食用油、砂糖などおもな食料品は配給手帳を手に行列して買い求めたが、商店の陳列棚には空きが目立っていた。それから二年後の九四年、モノ不足は解消され、配給制も廃止されていた。その後は、目にみえるほどのスピードでモノがゆたかになり、市場に出まわる商品がどんどん多様化していった。たとえば、夏にしかなかった野菜が、冬にもみられるようになった。モフラク（食料品、雑貨をあつかうキオスク）が町の通りに急増し、二四時間営業の店まであらわれた。レストラン、バー、ディスコがつぎつぎにオープンし、昨年にはドイツなどと合弁で生ビールをタップから注いでだす本格的なビア・バーも出現している。

このように表面的には華やかになりゆたかになったが、インフレや貧困、失業などの問題は相変わらず人びとの暮らしに暗い影をおとしている。社会主義時代には、仕事をいかにうまくサボるかを考えていればよかったが、いまは働かなければ食べていけない。時代の潮流にうまくのった人は巨額の富を手にいれたが、それにのり遅れた人は貧困とのたたかいがはじまる。貧富の差が一気にひろがった。

ある日、友人の知人の家に招待されたが、驚きの連続であった。まず、迎えにきたのは、運転手付きのベンツである。そこの主人は「モンゴルでは日本車も人気があるが、わたしはこれにしか乗らない」と、高級ベンツを二台所有しているという。高層アパートの階段はゴミが散乱して相変わらず汚いが、家のなかに一歩はいると、内装は美しい装飾でほどこされ、モノであふれている。子ども部屋にもおもちゃが山積みになっていた。家具はすべてヨーロッパからもちこんだらしく、壁紙やカーテンなども本当に美しい。おまけに奥さんは目元を美容整形してもらったという。時流にのってバリバリ働くビジネスマンらしく、会食中にも携帯電話が鳴りっぱなしでどうも落ち着かない時間をすごした。

そのいっぽうで、貧困問題はモンゴル国政府の頭の痛い問題である。政府発表では、国民の四分の一が貧困ライン以下の暮らしをしているという。モンゴル国政府、それを支援する各国政府、それにNGOも加わってさまざまな貧困対策を講じているが、学校へ行けず、靴磨きやジュース売りをして家計をたすける子どもも増え、ストリートチルドレンも相変わらずおおい。子どもだけでなくおとなも疲弊している。モンゴルでは犯罪全体の二〇パーセントが酔っぱらいの犯行で、泥酔して路上で逮捕される酔っぱらいの数も年々増加傾向という。疲れきった頭と体に、四〇度の蒸留酒アルヒはあまりに強すぎるではないか。先に紹介したニューリッチ氏は「アルコールがいちばんもうかる」と自慢げに語っていたが、自分の首をしめていることに気づいていない。これらの社会問題も、経済の安定とともに多少やわらいだような印象をうけることもあるが、まだ根本的に解決されたわけではない。

社会主義時代の観光

ここで、観光ビジネスをとりあげることにする。観光ビジネスは、ほかの産業にくらべる

↑ユキヒョウは捕獲が禁止されているが、密猟もあとをたたない。毛皮が没収され、ツーリストゲルに飾られていた

→映画チンギス・ハーンのロケに使われたゲルをそのまま活用しているツーリストキャンプもある

とすくない投資額でおおくの外貨を獲得することができるので、モンゴル国のように経済たて直しのための資本をおおくもたない国に適している。また、関連産業がおおくの雇用の増大にむすびつくなど経済波及効果も大きいため、国家全体の開発における牽引役となる可能性もある。開発にともなう環境破壊も比較的すくないといわれているうえ、世界の観光業界では、この数年、環境にやさしいエコツーリズムという概念が重視されるようになっているため、好条件がそろっている。

モンゴル国政府は、前政権時代「一九九五年～二〇〇五年の観光開発の基本指針」を作成しており、新政権成立後、インフラ開発省に観光課をもうけるなど観光分野の開発に力をいれている。今年三月末には観光関係者の会議をもつなど、六月に開催予定の国際投資会議に向けて周到な準備をしてきた。国内総生産に占める観光産業の外貨収入額は、九四年には一・七パーセントにすぎなかったが、二〇一〇年には最大四〇パーセントにまで引きあがるとの見通しもある。観光立国としての模索がはじまっている。

社会主義時代には、人の移動がかなり制限されており、外国人旅行者（商用・観光ふくむ）二三万九六〇〇人（八一年）のうち九五パーセントが旧ソ連からであった。当時、日本からの旅行者は三〇〇人にすぎなかった。草原の暮らしを満喫する地方のツーリスト・キャンプもホジルト、テレルジ、南ゴビの三カ所のみであった。旅行業務は国営旅行社ジョールチンが独占しており、また、西側の外国人が宿泊できるホテルもバヤンゴルとウランバートルの二軒のみで、サービスという概念があまり重視されることのなかった時代であった。

革命の英雄スフバートルの像。ソ連についで世界で2番目に社会主義国家を建設した功労者として、政府庁舎の前にたつ

民主化後の観光ビジネス

民主化後、ロシアからの旅行者数が激減し、モンゴルをおとずれる旅行者の全体数も減少したが、西側諸国からの観光客の割合は増加している。一九九四年の外国人旅行者一一万一〇〇〇人の内訳は、ロシア五万六七〇〇、中国三万二四〇〇、日本五六〇〇、アメリカ合衆国三二〇〇、ドイツ二〇〇〇、イギリス一五〇〇、その他九六〇〇人である。ロシアと中国からの旅行者はほとんどが商用と考えられるため観光目的の旅行者数を一万二〇〇〇人とすると、ほぼ半分が日本人にあたる。日本では、この数年のモンゴル・ブーム、直行便の開通、ツアー料金の低価格化などにより観光客が急増し、九七年は一万人をこえた。観光分野は、すくない投資で手っ取り早く金もうけができるためおおくの企業が新規参入し、その数は二〇〇社をこえている（九四年）という。わたしが観光業で経験があるというのを聞きつけて、いっしょにやらないかと話をもちかけてきた人も一人や二人ではない。

あたらしいホテルもつぎつぎに建てられ、在モンゴル国日本大使館作成の「ウランバートル・ホテル・リスト」には一〇軒以上のホテルがリストアップされている。また、キャンプ地の数もいっきに増え、前記の三カ所に加え、ウンドゥルシレート（映画『白い馬』の舞台）、ムングンモリト、タワンツオヒォート、ダダル（チンギス・ハーンの生地）、ジャンハ、ブルド、アルタンボラグなどつぎつぎとあたらしいツーリスト・キャンプが設置されている。ツアーの内容も多様化した。大草原を駆けまわる乗馬トレッキング・ツアー、考古学者をともなった遺跡めぐりツアー、援助物資を届けたり、医師のボランティアなど援助ツアー、登校拒否の子どもたちのキャンプ、オフロード・カーやバイクでのラリー、気球・パラグライダー・超軽飛行機などによる空の旅、社会主義時代からつづくハンティング・ツアーなど、さまざまな可能性が追求されている。

観光分野では一九九四年、日本の専門家による調査がおこなわれている。

調査報告書を概観すると、モンゴルの自然は観光資源として充分な魅力をそなえているいっぽう、人文観光資源については、かつて一〇〇〇以上あった寺院が社会主義時代に徹底的に破壊されたためみるべきものがすくなくなってしまったという。また、博物館・美術館も観光客誘致につながるような立派なものがなく、宿泊施設は量・質ともに低レベルで、道路、電気、通信などのインフラ整備も必要であるなどの問題が指摘されている。

また、昨年からはEU（欧州連合）のTACISプログラムで開発調査がはじまっており、国際協力事業団（JICA）もマスタープランづくりのための調査をはじめている。右にあげた宿泊設備やインフラなどハード面の整備には大きな資本の投入が必要であり、これには現在おこなわれている調査の結果とそれにつづくであろう公的資金援助の供与をまって長期的に考えるとして、ここでは、ソフト面を充実させ、ハード面の不備をすこしでもおぎなうことができないか模索してみたい。

ソフト面の充実を発想する

観光が、異質の文化的コードをもつ人同士の相互理解をたすけ、それによって民際交流をうながす効果が期待できるとして、旅の内容

↑ウランバートル市内を一望するザイサンの丘にたつ戦争勝利記念塔。モンゴル軍はソ連軍と団結し、ナチスドイツと日本帝国主義に打ち勝ったと記されている

→市内の中心、ウランバートルホテルの前にたつレーニン像。インテリ層の住宅にはレーニン全集がかならずある

の充実がよりいっそうそれを高めるとすれば、そのために、ゲストである観光客もホストであるモンゴル側も発想をかえて取り組む必要がある。

ゲストとしての日本人は、おおむねモンゴルに対して「ゆたかな大自然（草原）」「素朴な遊牧民」「のどかな遊牧生活」などを期待する。だが、事実は本当にそうであろうか。「ゆたかな大自然（草原）」＝確かに草原へ行けば三六〇度地平線をみわたすイメージどおりの世界がひろがる。ところが、ゆたかにみえる自然もじつはたいへんもろく、沙漠化がすすんでいる地域もあり、また大気汚染、水質汚濁など環境問題とも無縁ではない。

「素朴な遊牧民」＝確かにモンゴル人、とくに遊牧民の暮らしは質素で、素朴な人間像を想像させうるかもしれない。しかし、これはあまりにも短絡的すぎないか。そっくりな顔立ちからは想像しにくいが、そこにはまったく異質の文化があることはいうまでもない。さらに、歴史認識、とくにハルハ川戦争（ノモンハン事件）や満州国など近・現代史に対する認識もことなっている。アジア諸国のなかでは比較的対日感情は良好であるといわれるが、先の戦争のわだかまりもまちがいなく存続している。

「のどかな遊牧生活」＝最高のシーズンである夏だけを切りとって享受する観光客には、冬や春のきびしさがなかなか実感として理解できない。マイナス四〇度にも達する厳寒の冬やポカポカ陽気から一転して吹雪になったりする不安定な春の牧畜業のきびしさは想像を絶する。はげしい吹雪のなか、強風にあおられてどんどん移動してしまう羊群を着の身着のままでウマにまたがり追いかけるうちに凍死してしまうこともあるという。そんな遊牧のきびしさが想像できるだろうか。

日本とモンゴル国とのあいだで自由な交流ができるようになってまもなく一〇年になる。これらのステレオタイプからそろそろ脱する時期がきているのではないだろうか。これまでのツアーのおおくは、モンゴルのすばらしい自然をみ（せ）さえすればそれで良いという認識がゲスト・ホスト双方にあったのではないか。大草原のすばらしさがお互いの理解を必要とさせてこなかったのかもしれない。異質の文化の存在をみとめ、その文化をすこしでも理解したいという姿勢をもてばステレオタイプの呪縛から解き放たれる。

食文化をアピールする

いっぽう、ホストの側のモンゴルではどうか。旅行者がステレオタイプをつき崩すための補助ができないものか。モンゴルにはヨーロッパの観光地にあるような立派な教会や城塞、発達した都市の魅力などみるべきものがほとんどないといわれる。他のデスティネーションに対するのとおなじ期待をもってモンゴルをたずねる旅行者には、目にみえない悠久の歴史や文化をわかりやすく解説することが不可欠である。帝国首都カラコルムに残る石碑だけをみせて「なんだ、こんなものか」と観光客にいわせてはならない。その荒涼たる大草原に首都を再現して語らなければ、そのすごさは理解できない。

遊牧民の素朴で単調な暮らしをみせるだけでは、エコロジーで先進的な生活文化の深さはわからない。何千年もかけて自然とともにつくりあげてきた遊牧文明を説明し、かたくなに守ってきた伝統的な暮らしがこの二〇世紀にも堂々と生きつづけていることを理解してもらうことが重要である。目にみえない部分を補足できる解説者、つまりすぐれたガイドの養成が急務である。

←1940年代に伝統的なモンゴル文字が廃止され、キリル文字（ロシア文字）を採用した。識字率は向上したが、旧ソ連の文化的影響もおおきかった。1994年には民主化によってモンゴル文字が復活し、小学校でも伝統的なモンゴル文字の教育がはじまった

食文化は旅の大きな楽しみのひとつであるが、モンゴルでは「仕方がない」と、つねに否定的に語られてきた。確かにホテルやレストランの食事は、メニュー・味付けともにもうひと工夫ほしいが、各家庭で客人をもてなすときの家庭料理、ボーズ、ホーショール、バンシどれをとってもホテルの食事よりはるかにおいしい。また、ホルホグ、シャシリグ、ボードグなど野外で楽しむ豪快な料理が、ホテルなどで供されることはまずない。モンゴル料理は、牧草だけを食べて自然に育ったヒツジやウシ、あるいはウマをその場でつぶしてすぐに調理する完全オーガニック・フードであることをもっとアピールしても良い。産直だ、有機農法だと血眼になっている「先進」国の消費者の心をくすぐる。

さらに生活に根づいている食事療法に注目して紹介すればどうだろうか。モンゴル人自身が本当においしいといえる高品質なアイラグ（馬乳酒）やホールモグ（ラクダ乳酒）などを観光客向けによく吟味して供してみてはどうか。そのとき、さまざまな効能を説明できれば興味深い。効能を共有することで、旅の内容が生まれかわる可能性がある。

また、食文化とともに伝統的なホスピタリティをなんとかビジネスとして活かすことができないものだろうか。現状がよくないからと安易に外部から導入する（あるいは押しつける）のではなく、伝統を発掘して整理し、さらに外に向けて効果的にアピールしていくことでモンゴル独自のサービス、観光文化が生まれる可能性があるのではないか。

エコ・ツーリズムの可能性

先に取りあげた報告書だけでなく、モンゴル政府の指針においても、エコ・ツーリズムを重視することが表明されている。エコ・ツーリズムとは、指導員や研究員とともにさまざまなきびしい規則を守りながら、自然の観察や研究に参加する旅、あるいは多様な生命との直接的なふれあいをとおして人間のもっている能力をできるだけ引き出す旅である。エコ・ツーリズムは、モンゴルの重要な観光資源である自然を最大限活かして観光開発をすすめる姿勢に通じている。

これをすすめるために高山植物が咲きみだれるウォーキングコース、トレッキングコースの開拓をすすめてはどうか。これらのウォーキングやトレッキングに、景観としての自然ではなく、自然のなかでの採集などのいとなみを地域住民とおこなうグリーンツーリズム（アグリツーリズム）とよばれる参加型の旅を組み合わせてみる。たとえば、モンゴル人がよくでかけるキノコ狩りやチャツアルガン（クロウメモドキ）などの採集はどうだろうか。チャツアルガンの実は、煮つめて保存し健康飲料としてもちいられる。これらあたらしい観光コースを開拓する際、モンゴルに長期滞在して各地を旅した外国人の意見を参考にすれば、観光として客観性をもたせることができる。将来、アミューズメント施設の建設や公園の整備をするに際してもこの自然をうまく活かし、なおかつ自然環境を破壊しない方法を考慮して、他の外国でおきたような自然破壊や住民立ちのきなどの社会問題をひきおこすことのないようにしたい。

自然資源の有効活用と同時に、あたらしい観光資源・魅力の発掘を考える。たとえば、現在でも観光資源のひとつであるナーダム（夏の祭典）であるが、観光客誘致により有効に活用できる形態を考えてみる。さらに、オボ（オボー）祭り（初夏の雨乞い）、チンギス・ハーン祭りなどすでに内モンゴルで観光資源化されている伝統行事についてはどうか、ツアガンサル（旧正月）を冬の大イベントとしてとりあげることができないものか。もちろん、さまざまな祭祀に外国人を参加させるかどうかはモンゴル側の意見が尊重されるべきである。また、匈奴、ウイグルの遺跡にも規模の大きなすばらしいものがあると聞いている。自然、文化遺産ともに観光資源としてアピールしながら、その整理・保存への支援活動を誘発する方向へもっていくことも重要である。

オフシーズンである冬にどうやって旅行者を誘致するか、これは大きな問題である。すくないアミューズメントをうまく組み合わせてなにかコースをつくってみてはどうか。たとえば、ツアガンサルの地方競馬はどうだろうか。はりつめた厳寒の季節、一面銀世界の大平原に忽然と人の集まりがあらわれ騒然としている様には驚かされる。また、競馬で疾走するウマの外観、走る姿も夏の競馬とはまたちがった迫力がある。冬のスポーツとしてアルペンスキーを考えれば、当然、ゲレンデ造営のための大きな投資と自然破壊を考慮する必要があるが、自然をそのまま活かすクロスカントリーを取りいれたコースが考えられないだろうか。ここでも、雪と氷に閉ざされたこの自然に生きてきた人びとの視点をもりこんでコースをつくる。

モンゴル人の視点の旅

先の報告書で、モンゴル国のツアーを内モンゴルと比較して、「旅行価格も数段低価格であり、ツアー内容も大差がなく、差別化、低価格化をうちださないと、内モンゴルにとられてしまう」とあるが、はたしてそうであろうか。

日本の旅行社が企画する内モンゴル草原ツアーは、ほとんど自治区区都フフホト近郊の草原にあるツーリスト・ゲルに宿泊するコースである。しかしながら、フフホト周辺は長年の農業開発のためほとんど開墾されて農耕地がひろがり沙漠化もすすんでいる。わずかに残った牧畜地帯も牧草がまばらで草丈も低く、内モンゴルを代表する草原地帯とはいいがたい。フフホト西南、黄河の南岸にひろがるオルドス地方は、チンギス・ハーン廟があり、毎年その祭典もおこなわれる由緒ある土地であるが、とくに沙漠化が激しく日本から植林ツアーが毎年組織されている。

内モンゴルは現在中国領であり、旅のスタート地点である国境（パスポート・コントロール）は当然、漢人の役人が漢語（中国語）で処理している。航空機、列車、タクシーなどのサービスもすべて漢語でなされる。フフホトなど、町の通りや人びとの服装は中国風で、聞こえてくるのはほとんど漢語である。このようなわけで草原の牧畜地帯にはいるまでモンゴルへきたという実感がなかなかわかないかもしれない。町の中心から自動車で一五分ほど走ればすぐに遊牧世界がひろがるモンゴル国と、町の近郊がすべて農耕地になってしまった内モンゴルとでは、旅の内容がおのずとちがってくる。もちろん内モンゴルでもすこし奥地へはいれば、純粋なモンゴル風がのこる草原地帯がひろがっている。たとえばシリンゴルやフルンブイル地方は、内モンゴルの純牧畜地帯として知られているが、その中心地へは北京から直行便も運行している。「草原ツアー」を標榜するならば、内モンゴルのすばらしい草原地帯をもりこんだツアーをぜひつくってほしい。

内モンゴルの旅づくりには、中国でマイノリティとして暮らすことで培われてきた独特なモンゴル文化、たとえばゆたかな食文化、生活習慣などその特徴を充分に活かし、モンゴル国以上にモンゴル人の視点で旅をつくる必要があると考えられる。

本棚

サヴァンナの青春と民族学者の青春

嶋田義仁著
『優雅なアフリカ』
明石書店　B6判　二五六ページ
一八〇〇円

アフリカはカメルーン国北部の原野奥深くに、伝統イスラーム王国であるレイ・ブーバ王国がある。王都の人口約二五〇〇のなかに、二〇近くの部族を含むという。

西洋的な意味において近代化されたといえるわれわれには、ドレイやハーレムの制度に特徴づけられ、一夫多妻制が認められたこの地について、どれだけ正確なイメージをもつことができるだろうか。

一九七九～八〇年にかけて住みこみ調査をおこなった著者は、まず若者たちの恋愛の自由さに驚いたという。遠くからたずねてきた友人には自分の小屋を提供するばかりか、ガール・フレンドまでいっしょに探す。うっかり「あの女性は美人だ」などと口にだせば、友人たちは話をまとめるために動きだす。そのうち著者の小屋のまわりに、顔見知りの女性がうろつくようになったり、王族の息子と結婚した新妻から、別の男性あての恋のメッセンジャーを頼まれたり。

こうした若者の青春をみつめながらも、しだいにこの世界なりのルールがあきらかになってゆく。

ハーレム制にしても、いくつもの部族を統合するという政治構造との関わりがある。また、ドレイ制があるとはいえ、王国の行政を実際に遂行する家臣のほとんどがドレイ身分であり、財産の所有はなくとも、食物・妻・衣服の保証は、主人の義務になる。

一夫多妻制については、女性解放としての側面からみつめている点が興味深い。女性の仕事には農作業、薪集め、水汲み、炊事、洗濯、さらに出産、育児などがあるが、酷熱のサヴァンナにおいては、単婚の場合女性の負担がおおくなり、多婚の場合よりも早死にしがちだという。若者たちの日常の生活描写も楽しいが、こうした制度の背景についての報告にも力がはいっており、読みごたえがある。

こうした筆者の調査の原動力となったのは、みずからのおかれた環境の限界を突き破り、人間の生きかたの別の可能性をみてみたいという思いであったという。そこに著者自身の青春のパトスがつたわってくる。

移動の民にみる住む文化

佐藤浩司編
『住まいをつむぐ』
学芸出版社　A5判　一三九ページ
二八〇〇円

世界の人びとの住まいを紹介する、シリーズ建築人類学《世界の住まいを読む》シリーズ第一巻である。本書では、刊行のことばにある、「住まいが学習によって伝えられる文化的な産物」であることが、もっとも端的にあらわれているということからか、移動生活をいとなむ一二の民族が紹介される。

どの民族にもほぼ共通するのは、移動という生活形態をささえる知恵である。移動する以上、先々で気候や建材の確保などの自然環境に応じて、すばやく住みよい住居をつくらなければならない。

刀一本でこうした住居をつくりだすネパールのグルン族の姿からは、既製のものを選択し消費するのみで、自分の利用目的にみあう融通性を生みだすことを見失いがちな、われわれの姿もみえてくる。

生活環境との密接なつながりにも圧倒される。コンゴの狩猟採集民エフェは、植民地時代から数十年におよぶキリスト宣教師の活動にも影響されず、自分たちの生活をたもちつづける。そこには個としての人生ではなく、森に住む祖霊とのつながりのなかで、エフェという民族の誕生から現在、そして子孫たちの未来へとつづく鎖の一部として自分があるという世界観がある。

カナダのイヌイットは、冬になると氷雪に覆われた海の上でアザラシ猟をおこなう。これは、「彼らが生まれながらにして寒さに強い人間であったからではなく、文化的な手段や工夫をこうじてきたからである」（岸上伸啓）という。一九七〇年代ごろからは政府の提供による住宅に住む者がおおくなったが、住宅が核家族を単位としても、なおも世帯をこえて集まり、食事分配や協同の狩猟漁撈をおこない、伝統的な流儀を保持した生活をしているという。

こうした環境に暮らす人びとが、具体的にどのような住居をつくりだしているのか。本書では住居の建築方法や実用性、家族の住みわけ、出産や性生活などのプライバシーの問題など、それぞれ興味深い問題が詳しく報告されている。地域もマレーシア、ボツワナ、エジプト、アメリカ、フランス、そしてモンゴルの遊牧民など豊富である。

住まいをとおして、さまざまな民族の文化を体感できるような一冊である。

筆者ならびに出版社より贈呈をうけた書籍

一九九八年三月一一日より六月一〇日までの到着分
順序――著・訳者　書名　出版社　定価

三島海雲　初恋五十年　甘くて酸っぱい人生遍歴　ダイヤモンド社　八〇〇円

嶋田義仁　稲作文化の世界観　『古事記』神代神話を読む　平凡社　二四〇〇円

小川　了　可能性としての国家誌　現代アフリカ国家の人と宗教　世界思想社　二四〇〇円

内林政夫　右の文化と左の文化　中国・日本おもしろ考　紀伊國屋書店　二〇〇〇円

鳥越憲三郎　若林弘子　弥生文化の源流考　雲南省佤族の精査と新発見　大修館書店　四〇〇〇円

立川武蔵　マンダラ瞑想法　密教のフィールドワーク　角川書店　一五〇〇円

周達生　文化としての食と旅　清水書院　一六〇〇円

横井雅子　音楽でめぐる中央ヨーロッパ　三省堂　二七〇〇円

※本ページ掲載の書籍の価格は、本体価格です。

次号

（No.86）は一〇月下旬にお手許にとどきます

編集後記

◆本号のモンゴル特集は、昨年の秋から企画しました。当初の予定が変更になったところもありますが、執筆の各先生方に力作をおよせいただき、ひろがりとふかみのある誌面が実現できたことを、心から感謝申しあげます。なかでも、巻頭の杉山論文は人類史上における遊牧の意味、遊牧国家、遊牧文明の意義を活写したものです。文字どおり「目からうろこが落ちる」論攷です◆数万カットにものぼる大塚知則氏の写真選択、写真構成には、大塚氏と何日もかけて作業をしました。今年一月にラフコンテをつくり、さらにヴァージョンアップするためには、どんな写真が必要かを大塚氏と討議、二～三月にモンゴルへ再取材していただきました。四～五ページの写真、正月の写真、モンゴル文字の写真、ウランバートルの夜景などがそのときの成果で、充実した誌面を構成することができました◆大モンゴル展には、ぜひ、足をおはこびください。おとなの絵本をめざした図録『草原の遊牧文明』は、シャラブの絵を徹底的に解読したものです。モンゴルの民族誌が、楽しく、わかりやすく理解できる仕掛けになっています（木村）

第二二巻第三号通巻八五号
監修　国立民族学博物館
季刊　民族学　85号©
会員頒布（本体二〇〇〇円）
一九九八（平成一〇）年七月二〇日発行
編集者　木村　滋
発行者　湯浅叡子
印刷所　凸版印刷株式会社
発行所　財団法人　千里文化財団
大阪府吹田市千里万博公園一－一
電話　〇六－八七七－八八九三
振替口座　〇〇九七〇－九－三一七九六〇
郵便番号　五六五－〇八二六
季刊民族学編集室
東京都千代田区飯田橋三－一－一八
電話　〇三－三二三〇－〇五三一
郵便番号　一〇二－〇〇七二